

1、司馬遼太郎記念館 訪問



久しぶりに空が明るく、気温も高いので、急に思い立ってドライブすることにした。

例の通り大雑把に地図を眺め「東大阪の司馬遼太郎記念館」を目指す。

168号線を北上し、壱分ランプから「第二阪奈(400円)」に乗り、トンネルが終わると大阪である。ついそのまま走ったので、目的の東大阪市を大分通り過ぎてしまった。

高速を降りた一般道路は迷路。最初に尋ねたお年寄り「へえ？ここにそんなもんがアリマスカイネ？」だったが、次の若者が丁寧だった。細かく指示され無事に記念館に到着。

まずはホールで司馬遼太郎のYTRを見て大体を把握。展示室で高さ11mの壁面一杯に並んだ図書に驚く。ここには自著を中心に資料等が2万冊並べられているという。

パイロットだった叔父が司馬の愛読者で、出会う度に感動した本のことを私に告げていたので、私も相当数を読んでいる。見慣れた装丁のものが並んでいて懐かしい。さらに、資料棚を見ていくと、日本音楽らしい並びの中に、私が用いてきた邦楽資料があり親しみを感じる。別棟の書斎・書庫・玄関・廊下にはさらに6万冊の蔵書があるというから驚異的である。

彼の小説は大部読んだが、『街道をいく』や『この国のかたち』には未読のものが多いため、斑鳩の図書館を利用しようと思う。

彼の命日2月12日は「菜の花忌」と呼ばれるそうで、すでに日本各地から送られた菜の花が記念館を囲んで沢山飾られていた。

司馬遼太郎記念館

SHIBA KYOTARO MEMORIAL MUSEUM

田道間守

十三 田道間守

一 かをりも高いたちばなを、
積んだお船がいま踏る、
君の仰せをかしこみて、
萬里の海をまつしぐら、
いま歸る、田道間守、田道間守。

二 おはさぬ君のみさききに、
泣いて歸らぬまごころを、
遠い國から積んで来た、
花たちは空の香とともに、
名はかそる、田道間守、田道間守。

『たじまもり』と聞いて上記を歌えるのは私と同年代の方であろう。

たじまもり（田道間守・多遲麻毛理）は、垂仁天皇の命を受け、海の彼方の『常世（とこよ）の国』へ不老不死の果実「ときじくのかくの木実」を探しに出掛け、十年掛けて実を持ち帰ったが、天皇は既に亡くなっており、田道間守は、墓の前で悲しみに暮れて絶命した。以上は古事記等に記される神話の挿話だが、もう少し探してみたい。

① 垂仁天皇

天皇家の第2代から9代までは謎が多く「欠史八代」と言われ、10代崇神帝あたりからやや現実的になる。垂仁帝は第11代で、日本武尊の祖父に当たる。相撲道のきっかけを作ったり、殉死を禁じて埴輪にしたなどの功績が知られる。墓所は奈良西ノ京。

② 田道間守

垂仁天皇に仕えた人だが、神話(記紀)では上記伝説以外に記載がない。しかし、他の伝承等を併せて見ていくと思いがけない話が浮かんで来る。

まず、田道間守の先祖は新羅王子の天日槍(アマノヒボ)で、半島の戦争に敗れて日本に帰化し、天皇に助けられて但馬国出島人の娘を娶って一家をなすという。以後、但馬を姓とし、三代後の但馬清彦が田道間守の父だとする。その後、田道間守の子孫たちは多遲麻・多遲摩などと名乗っていたが、いつしか『三宅(ミヤケ)』となる。ミヤケとは『屯倉(ミヤケ)』であり、天皇家の「食糧庁長官」「農業長官」を意味するから、田道間守が垂仁天皇に橘の採取を命じられた理由も推察できることになる。

③ ときじくのかくの木実（非時香菓）

非時香菓は『橘』言われるが、植物学的な正確さは不明である。田道間守は常世(とこよ)国から橘を持ち帰り、九州伊万里に植え、その内の数本を持って大和へ帰ったが、既に天皇は亡くなっており、彼は半分を飛鳥村に植え、残りを持って奈良西ノ京の天皇陵に捧げて悲嘆死した。彼の墓は天皇陵の濠の中の小島だという。



橘祖神「田道間守」

④ 常世（とこよ）の国

常世とは何処か？ は難しい問いで、資料に乏しい上に「常世」という憧れや想像上に近い命名がなされているからである。橘(柑橘)から南国をイメージし易いが、当時の舟や航法では無理と言うべきで、最も近いところで済州島だろうか？

済州島なら田道間守の先祖は半島から渡ってきたという伝承からも理解がしやすい。

しかし、済州島に橘があったかどうか確実性はない。暖流の北上から橘の自生も考えられるが、田道間守は半島沿いに現在の大連あたりから中国山東半島へ渡ったのかも知れない。十年余かかって帰朝したと言われるので、それ以上の南下は無理と考えられる。

⑤ 伊万里神社・橘寺



伊万里神社

田道間守が帰国したのは九州伊万里海岸といわれ、彼は持ち帰った非時香菓を岩栗山へ植えて生存を確保し、その内の8本を持って都へ向かった。このうちの4本が植えられたのが飛鳥村。残る4本を垂仁天皇陵に捧げたという。(8本8本の説もある)

田道間守が植樹した岩栗山の橘は次第に繁茂し、宝亀元年(770)にこの地に来た橘嶋田麻呂が、山麓地にイザナギ・イザナミ尊と橘氏初代の橘諸兄(もろえ)を祀り長らく橘ノ宮(香橘神社)と称していたが、その後、伊万里津の戸渡嶋社が合祀されて伊万里神社と改称。昭和30年に兵庫県の中嶋神社を勧請した際に、田道間守も菓神として祀られる。果実と菓子は同様と考えられたのである。学芸員に尋ねたところ、土地の古老で橘を試食した者は多いが、戦後、生産性向上が至上命令となって橘は切られたとのことである。伊万里神社の社地には、この地出身の『森永製菓創業者』の森永太一郎氏のブロンズ像が建つ。

一方、奈良明日香村の『橘寺』は、田道間守が植えた非時香菓の故地と想像される。

聖徳太子の祖父の「欽明天皇」はこの地を「別宮」とし橘宮と称していたが、その子の用明天皇(橘豊日皇子)もここを別宮としここで誕生したのが聖徳太子である。

以後、この地から『橘姓』を称する者が多く出て、聖徳太子没後、焼失した法隆寺を再建するのに橘氏の支援が大きかったという。

垂仁天皇陵は唐招提寺や薬師寺に近い尼ヶ辻の西町にあり、濠に田道間守の墓と言われる小島が浮かぶが、立ち入り禁止で詳細不明。

奈良漢国神社にも田道間守が菓神として祀られているが、詳細は未調査。



東門より本堂を見る



田道間守の墓

奈良の俳句と川柳 まだまだ寒い日が続く

砂利清し畝傍御陵の松の内
御神籤が四カ国語の初観音
二月堂まで石畳 冬銀河
寒三日 月大仏殿の鷗尾の上

雪しまき 風鐸揺るる朱雀門
決断のつかぬ離農や鋤始め
鹿せんの売り手は二重の膝毛布
松尾寺 下馬碑の前で車停め

峠凍て 車を拒み 屋静か
絡みつつ駆け登りゆく山火かな
朝日浴び 生駒の山のまだら雪
我が庭に 大方揃う若葉かな

門灯消し 昨夜に勝る星仰ぐ
発車待つ間に撮れし お山焼き
金剛の灯 きらきと 春立つ夜
冬の蚊の一匹を追う 阿修羅かな

ミサイルに国威託して民飢える
春節や 黒く昇った初日の出

飢える国 三代だけは肥えている
嫌がらせするのが人民解放軍



三月 銭湯会話

所要あり いつもより遅く入浴
顔触れの違う人達が会話してる
「アンナア ◇€\$∫▽ ノナア」
「アレアカン ◆・△*∫ ヤ」
私には耳慣れぬ言葉が続く
帰化人の子孫たちじゃるか？

神戸・南京町の春節